

〈震災から3年目を迎えて〉 いわて

語らいが生まれる場で

いわて生協「グループ活動費用補助」を利用した活動



「いきいき教室」の皆さん。左から奥 良子さん、長谷川節子さん、盛合栄子さん、長洞辰子さん。

岩手県宮古市の高台にある弘川仮設住宅。その一角にある談話室から、にぎやかな笑い声が聞こえてきました。毎日、午前9時過ぎから午後3時ごろまで活動している「いきいき教室」の皆さんです。2011年10月に活動をスタート。6人のメンバーでお手玉やひざ掛け、バッグ、鍋カバー、

帽子などの手芸品を丁寧に作っており、商品はいわて生協マリンコープDORA（宮古市）で販売しています。

お伺いした3月12日は縫い針などを刺しておく針山やティッシュボックスケースなどを製作していました。「みんな震災前は針仕事なんかしたことないのよ」と笑うのは長洞辰子さん。しかし、かきの養殖の仕事で培われた器用な指先からは、次々と作品が出来上がります。

実は、材料費やお菓子、お茶などの購入には、いわて生協の「グループ活動費用補助」を活用しています。これは被災地や内陸に避難した方が5人以上集まって行なうサークル活動やお茶会などを対象に、1回3,000

円（1カ月最大4回まで）を上限にいわて生協が補助しているものです。

「ここはいつもにぎやかで、最高の場所なんです」とメンバーの盛合栄子さん。このように日々、語らうことができる場所があることは、被災した方にとって大きな励みとなっています。



5個セットお手玉はマリンコープDORAでも販売中。

写真で見る「被災地のいま」

撮影者：いわて生協 小野寺真さん (①)
いわて生協 杉村洋一さん (②、③)
いわねスタジオ (④、⑤)
2013年3月11日付近撮影



① 一角には、いまだがれきが積み重なっている（釜石市）。



② 「うごく七夕まつり」の山車。保管場所が確保できないため、ブルーシートをかけて風よけにしている（陸前高田市）。



④ 高台から望む（山田町）。



⑤ 津波到達地点から望む（宮古市鉾ヶ崎）。



③ 奇跡の一本松復元の様子（陸前高田市）。